＜こころ＞と＜ことば＞の言語学

青木三郎
筑波大学人文社会系
国際比較人文社会研究センター

＜こころ＞の諸相と言語

- 日本語の＜こころ＞
- 漢字　心・思
- インド・ヨーロッパ語の＜こころ＞
- 古典ギリシア語→ラテン語
- ロマンス語
- ゲルマン語
- ＜こころ＞の在りか

朝食はシリアル！

cereal（穀物）
corn（麦）
kernel（穀粒）
core（芯）
carnal（肉体の）
cardiac（心臓の）

ローマ神話　　女神ケレース（Ceres）
ギリシア神話　地母神　デーメテール

ケレーアーリア（Cerealia）

女神コレ–（Kovrh)

- Ker, Car, Q're, Cara, Kher, Ceres, Core
- カルナック、ケルレスカン、ケルカド、ケルマリオ
- ケルマリオ＝異教の処女神（ケル）の名と女神マリの名を結びつけたもの
- ケルマリもあるときはケルの娘、あるときはケルの母、またあるときはケル自身
- ブルターニュのカルナックやドナウ河沿岸のカルヌンタムの住民たちは、ローマ時代には、自分たちのことをカルヌーテ（「女神カルの子孫」）と呼んでいた
- 女神カル
- カルメル山　イスラエルにおける最古の聖地のひとつ　カルの土地　カルの息子や夫の「男神たち」baalimの土地
- コレーは、コプト人の宗教にあっては、偉大な力を持った女神
- コレーイオンすなわちコレーの祭りは、毎年1月6日に行われた。この祭りは後にキリスト教に吸収され、「御公現の祝日」Epiphanyとなる。
- コレーの祭りは、この処女神が新年の神アイオーンを生んだことを祝うものだった。このときコレーの裸像が、金の星や十字架のしるしで飾られ、人々にかつがれて、神殿の周囲を7回まわった。聖職者たちは大衆に向かって、処女神がアイオーンを生みたもうたと宣言した[14]。
- コレーイオンの祭りはイギリスの伝承に伝えられ、キルン（「収穫の祭り」）になった。
- のちに教会は、この祭りを「聖母マリアの祝日」に変えた。キルンKirnは、その中に穀物神が甦った聖なる「子宮の壺」を表すギリシア語kernと語源が同じ。

manas - citta

- サンスクリット語　citta（チッタ）　manas（マナス）
- 『リグ・ヴェーダ』 manas
- mind（知力、記憶、理性）
- intellect （思惟能力）
- perception（知覚作用、認知）
- sens(感覚機能、知覚、観念）
- will（意志、決意、意欲）
- soul（霊魂、精神、心、生気）
- thought（思考、思索、意見、配慮）
- meno, memor（ギ） meminisse, monere（ラ）
- meinen （独）, mean （英）
- manas – citta (thinking, observing, desiring, intending)

フリド／フリダヤ　hrd hrdaya

- 『リグ・ヴェーダ』

  フリド＝　こころのはたらき、感情・情緒のよりどころ

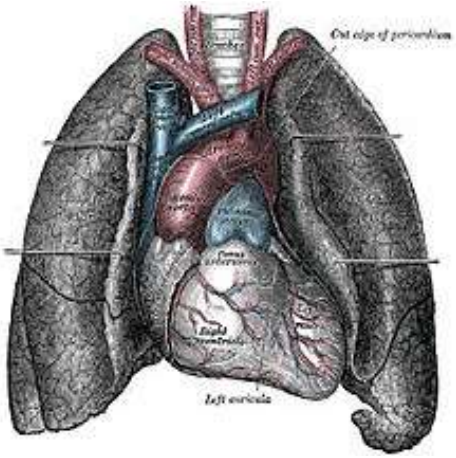
  Herz（独） heart（英）
- 古英語 *heorte* < ゲルマン祖語 **xirtan* < 印欧祖語 **ǩerd-*
- 同系のゲルマン語: オランダ語 *hart*, ドイツ語 *Herz*, スウェーデン語 *hjärta*
- 同系の印欧語別語派: ギリシア語 *καρδία*, ラテン語 *cor*, アイルランド語 *craidd*, ロシア語 *сердце*, リトアニア語 *širdis*

肺（胸）と息

phrenes
thumos
kardia
ホメロスの「心」

Le *thumos* (« âme-sang ») est associé avec le sang et le souffle. Il désigne donc la capacité vitale de l'être humain et plus précisément sa capacité d'interaction avec le monde extérieur où s'exprime le besoin d'être reconnu. Le *thumos* est ce qui pousse à désirer et à agir, à s'exprimer dans le monde. L'être humain peut dialoguer avec son *thumos* en cas de détresse ou d'angoisse, il s'extériorise alors vis-à-vis de lui-même et se retrouve face à ses émotions. Le *thumos* est contenu dans les *phrenes*, c'est-à-dire les poumons ou la poitrine, et disparait après la mort

心



こころ

こころ　あくがる
心　浅し
心　急ぐ
心　至る
心　痛し
心　浮く
心　動く
心　打つ
心　移る
心　多い
心　おかし
心　治む
心　重し
心　及ぶ
心　折れる
心から鬼を出せ
心から乞食（かたい）となる
心　添う
心　立つ

こころ　絶ゆ
心に落ちる
心に垣をさせよ
心に掛く
心に心をからかう
心に心をつく
心に籠（こ）む
心に乗る
心にむせぶ
心の垢
心の雨風
心の池
心の勇み
心の色
心の海
心の鬼
心の風
心の琴線
心の草

心の在りかは、内蔵である。

三木成夫 『海・呼吸・古代形象』
西原克成 『内蔵が生み出す心』

心の在りかは、脳である。
養老孟司 『唯脳論』
茂木健一郎 『心を生み出す脳のシステム』

ヘブライ語の *leḇ*（こころ）をめぐって

高橋 洋成
筑波大学人文社会系

ヘブライ語の *leḇ* について

- ヘブライ語で一般に「こころ」と訳されるのは、
  - לֵב*leḇ*（男性名詞、複数形 לִבּוֹת *libboṯ*）
  - לֵבָב*leḇɔḇ*（男性名詞、複数形 לְבָבוֹת *leḇɔḇoṯ*）
  - 意味の差はない。
  - 解剖学な意味では「心臓」。
- 今回は聖書ヘブライ語における *leḇ, leḇɔḇ* を中心に。
  - ヘブライ語は時代差や地域差が大きいが、本発表は聖書ヘブライ語（いわゆる『旧約聖書』の言語）を対象として、現代的な医療知識の影響を受けていない、古代の人間観や宗教的な身体感覚を見ていきたい。

旧約聖書の臓器について

- 最初に、旧約聖書に見られる臓器について。
- *leḇ, leḇɔḇ*「心臓」
  - ヘブライ語の属するセム語族に共通（祖語 **libb-*）。
  - 古代オリエント世界で最も重要な臓器であり、精神活動全般を司る。
  - 機能としてはむしろ（現代的な意味での）「脳」に近い。
  - 旧約聖書では 858 回使われ、うち 814 回が人間の「心臓」ないし「こころ」として用いられる。

旧約聖書の臓器について

- *kɔb̲ed̲*「肝臓」
  - セム語族に共通する語根 √*kbd*「重い、重要な」を持つ。メソポタミア地方では心臓に次いで重要な臓器であり、「肝臓占い」で神意を伺う。
  - ところが、旧約聖書では 14 回しか言及されない。
  - 肝臓には *mrerɔ*「胆嚢」があり、*mrorɔ*「胆汁」が入っている。語根 √*mrr* *は*「苦い」。

旧約聖書の臓器について

- *kilyoṯ*「腎臓」
  - セム語族に共通するもの（セム祖語 **k(u)lyat-*）。
  - 旧約聖書では心臓に次いで大事な臓器であるが、使用回数は 31 回（うち、動物犠牲の文脈が 18 回）。
  - しばしば *leḇ*（こころ）との対比で「おもい」と訳される。*kilyoṯ* の痛みは神の懲らしめであり、人間を正しい判断へ導く（cf. ヨブ記 16:13、詩篇 73:21）。

旧約聖書の臓器について

- *ḳɛrɛḇ*「体腔」
  - 胴体の内部であり、しばしば「こころ」と同義。また、中身を総称して「はらわた」とも訳される。
- *meʕim*「内臓」
  - 全ての臓器は *ḳɛrɛḇ* または *meʕim* と呼ばれうる。
  - 肺、胃、腸あるいは脳に対する固有の名称は見当たらない。
- 全ての臓器が何らかの精神活動に関与しているが、*leḇ*（心臓）の使用回数は突出している。

旧約聖書の生命観について

- 人間の精神活動に関わる語について。
- 人間はどのように創造されたか。
  - *wayyiyṣɛr yhwh ʔelohim ʔɛṯ-hɔʔɔḏɔm ʕɔpōr min-hɔʔaḏɔmɔ, wayyippaḥ bʔappɔw* ***nišmaṯ ḥayyim****, wayhi hɔʔɔḏɔm l****nɛpēš ḥayyɔ****.*
    - 「神なる主は土（アダマ）の塵なる人（アダム）を形作り、その鼻に**生ける *nišmɔ*（いき）**を吹き込んだ。すると人（アダム）は**生ける *nɛpēš*（のど）**になった。」（創世記 2:7）

旧約聖書の生命観について

- *nɛp̄ɛš*
  - セム語族に共通するもの（セム祖語 **napš-*）。
  - 語源はおそらく「のど、いき」であり、転じて「食欲、いのち、たましい、いきもの、ひと」。
- *ruᵃḥ*
  - アッカド語になく、西セム語族に共通するもの。
  - 「風」や「いき」を意味し、転じて「霊」とも訳される。
  - *nišmɔ* 「呼吸」と同義に用いられることが多い。

旧約聖書の生命観について

- *nɛp̄ɛš*「いき」と *ruᵃḥ*「いき」の違い。
  - 原義が「のど」の *nɛp̄ɛš* は *dɔm*「血」や *bɔśɔr*「肉」と結びついた「いのち」の統合的表現。
  - 原義が「風」の *ruᵃḥ* は人知を越えた神の力であり、「もの」を「いきもの」にするもの。
  - 「いきもの」の死とは、*ruᵃḥ* が取り去られて神に帰ること。呼吸を失った *nɛp̄ɛš* の肉体は土の塵に戻る（cf. 詩篇 146:4）。
  - 呼吸や肉体を失ってもなお *nɛp̄ɛš* は存在し、*šʔol*（地下の冥界）へと下って行く。

旧約聖書の中の *leb̲*

- ここから、旧約聖書における *leb̲*, *leb̲ɔb̲* の使用例を具体的に見ていく。
  - 臓器、器官としての *leb̲*, *leb̲ɔb̲* の働きはどのようなものか。
  - 知的活動と *leb̲*, *leb̲ɔb̲* はどのような関係があるのか。
  - *leb̲*, *leb̲ɔb̲* はどこにあるのか。

臓器としての *leḇ*

- 現代的な意味で生命を維持する「心臓」とは異なり、*leḇ* は身体運動を司る。
  - *wayyɔmɔṯ* ***libbo*** *bḳirbo, whu hɔyɔ lʔɔḇɛn. wayhi kaʕᵃśɛrɛṯ hayyɔmim, wayyiggoḏ yhwh ʔɛṯ-nɔḇɔl, wayyɔmoṯ.*
    - 「**彼の *leḇ*** は**彼の *ḳɛrɛḇ*（体腔）**の中で死に、彼は石になった。十日ほど経ち、主がナバルを打ったので、彼は死んだ。」（サムエル記上 25:37-38）
  - *leḇ* が死ぬと体が動かなくなるが、生物として死ぬわけではない。

臓器としての *leḇ*

- *leḇ* を強め元気づける。
  - *ḳum ʔᵋḵɔl-lɛḥɛm wyiṭaḇ* ***libbɛḵɔ****.*
    - 「起きてパンを食べ、**あなたの *leḇ*** を直しなさい。」(列王記上 21:7)
- *leḇ* の状態は人の動きに関与する。
  - 精神的な衝撃で *leḇ* が狭まったり、激しく鼓動すると、人は自由に動けなくなる(cf. エレミヤ書 4:19)。
  - 飲食や精神的な安らぎによって *leḇ* が広がったり、状態が良くなると、人は自由に動ける(cf. 詩篇 119:32)。

感覚器官としての *leḇ*

- *leḇ* は「知る」を司る器官である。
  - *wloʔ-nɔṯan yhwh lɔḵɛm **leḇ** lɔḏaʕaṯ, wʕenayim liʳoṯ, wʔɔznayim lišmoaʕ ʕaḏ hayyom hazzɛ.*
    - 「知る ***leḇ***、見る両目、聞く両耳を、主は彼らに与えなかった。今日もそうである。」（申命記 29:3）
  - ***leḇ*** *nɔḇon yiḳnɛ-dɔ́ʕaṯ, wʔózen ḥᵃḵɔmim tḇaḳḳɛš-dɔ́ʕaṯ.*
    - 「悟りの ***leḇ*** は知識を得、知恵の耳は知識を求める。」（箴言 18:15）

感覚器官としての *leḇ* と知的活動

- *leḇ* には知識が蓄えられる。賢者は知識を引き出すことができるが、愚者はそれができない。
  - *umi**llibbɔm** yoṣíʔu millim.*
    - 「彼らは**自分の *leḇ*** から格言を引き出す。」(ヨブ記 8:10)
  - *bśipṯe nɔḇon timmɔṣeʾ ḫɔḵmɔ, wšéḇɛṯ lɣew ḫᵃsar-**leḇ**.*
    - 「悟りの唇に知識はある。背中への杖は ***leḇ*** の不足。」(箴言 10:13)
      - 思考力に欠けると、言葉による躾ではなく体罰になる。

感覚器官としての *leḇ* と知的活動

- *leḇ* に蓄えられた知識の応用。
  - 「***leḇ*** の上に置く」（イザヤ書 42:25）
  - 「***leḇ*** に刻む」（箴言 7:3）
    - 記憶し、悟ること。
  - 「***leḇ*** の中にあるものを全て行え」（サムエル記上 14:7a）
    - 計画や意図。
  - 「***leḇ*** を見出す」（サムエル記下 7:27）
    - 決断すること。

知的活動としての *leḇ*

- *leḇ* が自分の外に出て行く場合。
  - 「***leḇ*** を彼らの上に置く」（サムエル記上 9:20）
    - 注意を相手に向けること。
  - 「***leḇ*** が出て行く」（創世記 42:28）
    - 勇気がなくなり怖じ気づくこと。
- *leḇ* がなくなる場合。
  - 「***leḇ*** を失う」（ホセア書 7:2）
    - 方向感覚や理解力を失うこと。
  - 「***leḇ*** を盗む」（創世記 31:20）
    - 洞察力を奪い、相手を騙すこと。

知的活動としての *leḇ*

- *leḇ* がもう一人の自分となる場合。
  - 「ダビデの ***leḇ*** が自身を打った」（サムエル記上 24:6）
    - 良心、もう一人の自分。
  - 「嘘の悔悛」と「***leḇ*** の悔悛」（エレミヤ書 3:10）
    - 本心からの悔悛。
  - 「彼らは**自分の** ***leḇ*** の幻を語る」（エレミヤ書 23:16）
    - 己の願望、欲望（本心からの願いではある）。
  - 「神は自分の ***leḇ*** に言った。」（創世記 8:21）
    - 神の本心、意図、決意。神自身。

知的活動としての *leḇ*

- *leḇ* には柔軟さが必要である。
  - *wnɔṯatti lɔhɛm* ***leḇ*** *ʔɛḫɔḏ, w****ruᵃḥ*** *ḫᵃḏɔšɔ ɛtten bḳirbḵɛm, wahᵃsiroṯi* ***leḇ hɔʔɛḇɛn*** *mibbśɔrɔm, wnɔṯatti lɔhɛm* ***leḇ bɔśɔr****.*
    - 「私は彼らに一つの ***leḇ*** を与え、**彼らの *ḳɛrɛḇ*（体腔）**の中に新たな ***ruᵃḥ*（霊、息）**を与える。**石の *leḇ*** を彼らの肉から取り除き、彼らに**肉の *leḇ*** を与える。」（エゼキエル書 11:19）
  - 肉の *leḇ* あるいは「しなやかな ***leḇ***」（歴代誌下 34:27）は洞察に満ち、新たな行動を起こすもの。
  - 石の *leḇ* あるいは「かたくなな ***leḇ***」（出エジプト記 4:21）は鈍感、人の言葉を受け入れない様子。

leḇ はどこにあるか

- 解剖学的な意味での *leḇ* の位置。
  - *wyehu milleʾ yɔḏo ḇaḳḳɛšɛṯ, wayyaḳ ʔɛṯ yhorɔm* ***beʸn zroʕɔw****, wayyeṣeʾ haḥeṣi mi****llibbo****.*
    - 「イェフは手で弓を引き絞り、イェホラムの**両腕の間**を射たので、矢は ***leḇ*** から半分突き出た。」(列王記下 9:24)
  - *leḇ* は両腕の間、つまり胸の中にある。
    - 「*leḇ* を叩く」(ナホム書 2:8)はずばり「胸」。

leḇ はどこにあるか

- 抽象的な意味での *leḇ* の位置。
  - 「**大洋の *leḇ*** に深く投げ込む」(ヨナ書 2:4)
    - 大海原のど真ん中。測り知れない深淵。
  - 「山は炎で燃え、**天の *leḇ*** まで(達していた)」(申命記 4:11)
    - 人間には達することのできない高さ。近寄り難いもの。
  - 「彼はまだテレビンの**木の *leḇ*** で生きていた」(サムエル記下 18:14)
    - 光の届かない奥の枝。芯。人の手の届かない場所。
- 定型表現。
  - アッカド語の *ina libbi* …、現代ヘブライ語の *be-lev* …
    「……の中に、中心に」

leḇ はどこにあるか

- *leḇ* は人の目に見えない本質を指す。
  - *ki hɔʔɔḏɔm yirʔɛ laʕenayim, wayhwh yirʔɛ lallebḇɔḇ.*
    - 「人は**目に見えるもの**を見るが、主は ***lebḇɔḇ*** を見る。」（サムエル記上 16:7）
- *leḇ* に寄り添うことは深い対人関係を表す。
  - *ʔeḵ toʾmar ʔᵃhaḇtiḵ, wlibbḵɔ ʔen ʔitti.*
    - 「どうして『私はお前を愛している』と言えるのでしょう。**あなたの *leḇ*** が私と共にいないのに。」（士師記 16:15）
  - *hin'ni ʕimmḵɔ kilḇɔḇɛḵɔ.*
    - 「見よ、私はあなたと共にいる。**あなたの *leḇ*** のように。」（サムエル記下 14:7b）

結論：*leḇ* とは何か

- 臓器としての *leḇ* は、生命よりも、人間の身体活動と知的活動を司る。
  - *leḇ* の状態が悪くなると四肢が動かなくなる（感情、疲れ）。
  - *leḇ* は知識を蓄え、判断を行う。
- 臓器としての *leḇ* は、自分ですら手の届かない体腔の中にある。
  - 転じて、中心や、人知を越えた奥義を指す。
- *leḇ* は良心・本心となり、もう一人の自分になる。
  - 自分でさえ手の届かない場所にいる内なる自分。
  - 神は、柔軟な *leḇ* に正しい知識を蓄えることを要求する。

余談:「たましい」か「こころ」か

- *nεp̄εš* と *leḇ* との共通性？
  - 肉、血、息の器として「ひと」を表す *nεp̄εš*。
  - 身体と知的活動の源である知識の器として「内なる自分」を表す *leḇ*。
  - 身体と呼吸を失い、冥界に下る *nεp̄εš* とは何であるのか
    → 内なる自分としての *leḇ* と解釈することも可能か。
- 新約聖書の人間観（テサロニケ人への手紙』I, 5:23）の再検討。
  - 文語訳（1917年）
    - 「汝らの**靈**（πνεῦμα）と**心**（ψυχή）と**體**（σῶμα）とを」
  - 口語訳（1954年）
    - 「あなたがたの**霊**（πνεῦμα）も**魂**（ψυχή）も**体**（σῶμα）も」
  - もしヘブライ語の *nεp̄εš* と *leḇ* が重なる意味を持っていたなら、ギリシア語の ψυχή（ヘブライ語の *nεp̄εš* の伝統的訳語）を「心」とした文語訳は興味深い。

参考文献

- Clines, D. J. A., *Dictionary of Classical Hebrew (DCH)*, 8 vols., Leiden, 1993-2011.
- Ginsberg, H. L. “Lexicographical Notes,” *Supplements to Vetus Testamentum* 16, 1967, 71–82.
- Koehler, L. H. & W. Baumgartner, *The Hebrew and Aramaic lexicon of the Old Testament (HALOT)*, Leiden, 1994-2000.
- ヴォルフ,H. W.（大串元亮訳）『旧約聖書の人間論』, 日本基督教団出版局, 1983.
- 並木浩一『ヘブライズムの人間感覚：＜個＞と＜共同性＞の弁証法』新教出版社, 1997.
- ニブ, M. A.（金井美彦訳）「旧約聖書における生と死」, R. E. クレメンツ（編）（木田献一・月本昭男監訳）『古代イスラエルの世界：社会学・人類学・政治学からの展望』, リトン, 2002, 555-585.
- 橋本功・八木橋宏勇『聖書と比喩：メタファで旧約聖書の世界を知る』慶応義塾大学出版会, 2011.
- אבן-א' שושן, *קונקורדנציה חדשה לתנ"ך*, ירושלים,2007.

筑波大学
University of Tsukuba

The Convergence of Civilization through Language: A Bengali Interpretation of Spirit, Mind and Heart

by Shakil Ahmed (Email shakil553@hotmail.com)
Post Doctoral Research Fellow
Center for International, Comparative and Advanced Japanese Studies (CAJS)
University of Tsukuba
Presentation at
University of Kyoto
3 Dec. 2013

筑波大学
University of Tsukuba

Contents **Slide No.**

Objectives & scopes … … … … … … … … … … … … … … ... 3
Analytical tools: spirit, mind & heart … … … … … … … … … … 4
Spirit (*Sanskrit*, *ātman* आत्मन्) … … … … … … … … … …. … ... 5
Spirit (Bengali, *ātma*) … … … … … … ... … … ... … … … ... 6
Upanishads & Sufism: Convergence of civilization… … … … … 7
Convergence of *ātma* concept in Bengal … … … … … … … … 8
Modern uses of *ātma* … … … … … … …. … ... … … … … … 9
Mind (Sanskrit, *manas* →Bengali, *mon*) … … … … … … … ... … ... 10
Dominant uses of mind (mon) … … … … …. … … … … … … .. 11
Heart (Sanskrit *hṛdaya* → Bengali *hṛdaya*) … … … … … … … … … ..12
Conclusion: empirical & metaphysical uses of spirit, mind & heart …13

筑波大学
University of Tsukuba

Objectives & scopes

- The aim of this presentation is to analyze the concepts of spirit, mind and heart in the context of Bengali language.
- Bengali is the second largest language (193 million speakers) after Hindi (260 million speakers) in the South Asia .
- Bengali language is the seventh largest language in the world.

Analytical tools: Spirit, Mind & Heart

Epistemological notions	
Metaphysical →	Spirit (***ātman)***
Empirical → (as responsive to worldly action)	Mind (***manas***) and Heart (***hṛdaya***)

Spirit (*Sanskrit, ātman* आत्मन्)

- According to Upanishads, the oldest Hindu text, ātman is inseparable from God (Brahmā ब्रह्मा). Ātman is inner self and Brahmā is the Supreme Self.
- **"Ātman is Brahmā *and* Brahmā is *ātman*"**

  (Brihadaranyaka Upanishad**)**

  The highest knowledge can be transcended through a relationship between Brahmā and *ātman*.

筑波大学
University of Tsukuba

Spirit (Bengali, *ātma*)

- Moden Bengali people are divided into two major religious camps, Hindus (predominantly in West Bengal, India) and Muslims (predominantly in Bangladesh).
- Shanskrit language goes well with the Hindu tradition and moreover Muslims of Bangladesh are looking for the new spiritual vocabulary with Persian and Arabic languages.

筑波大学
University of Tsukuba

Upanishads & Sufism: Convergence of civilization

In Arabic and Persian language *ruha (ātma)* is world for immortal being which has transcendental quality like *ātma***.** *Both ātma* and *ruha* look for the inner peace of human being.

In Sufism (a Persian way of mysticism) *ruhu* or *ātma is the lover and she is in search of beloved one (God).*

筑波大学
University of Tsukuba

Convergence of *ātma* concept in Bengal

Ātman concept has been blended in Bengali through Hindu and Persian traditions.

"Arshinagar [a self-reflecting place] is close to my home
A neighbor [Brahmā] lives there
I've never seen Him for single day.
He [Brahmā] and I [*ātma*] live in a same house
Nevertheless, they are apart miles away."
by Lalon Shah (1774-1890), A *baul* poet in Bengal

筑波大学
University of Tsukuba

Modern uses of *ātma*

In Bangladesh *ātman* is perceived as the purest form of self which is related with the peace. The metaphysical view of *ātman* has changed in modern time to worldly reward.

For example,

> “John is in peace by the news the success of his exam. ”

There is other uses such as

> Self-development is *ātman-vikāsa*.

Mind (Sanskrit, *manas* → Bengali, *mon*)

In Bengali mind is not related with the etiquette like,

‘please don’t mind’

Rather is commonly refer to remembering something. Of course, there are other synonyms of the word *manas* in Sanskrit with different implications. I will discuss the dominant uses of mind in Bengali.

筑波大学
University of Tsukuba

Dominant uses of Mind (mon)

- There are two major uses of mind in Bengali.

- First, remembering something - “Can you remember (*mon*) where his home is?”

  This means, someone had an experience of visiting the home and s/he tries to remember it again.
- Second, psychological state - “John feels distressed (bad mood of *mon kharap*) today.”

  This is about the psychological state or wellbeing of a person.
- In both cases experience has a key role in remembering and psychological state

Heart (Sanskrit *hṛdaya* → Bengali *hṛdaya*)

- The spirit (*ātman*) is related to the metaphysical concept but heart (*hṛdaya*) does not refer God.
- *Hṛdaya* belongs to human being and responsive to the gain and loss of the material world.

"My heart (*hṛdaya*) is dancing with the dance of peacock."

by Rabindranath Tagore, Bengali poet, first Noble laureate in literature in Asia

筑波大学
University of Tsukuba

Conclusion: empirical & metaphysical uses of spirit, mind & heart

Through experience human is demystifying the vagueness of *ātman and* Brahmā. The search for certainty and peace seem dichotomous. Baul, the spiritual sect of Bengal looks world-rejecting asceticism and sacrifices establishment.

Modern Bengali satisfies physical and emotional needs by redefining spirit, mind and heart. This redefinition is a delicate balance between empiricism and metaphysics. They are inheritably contradictory, nevertheless, important to understand Bengali mind.